琉球大学学術リポジトリ

サマープログラムに対するニーズと評価：受講生と指導者に対する調査の質的分析から

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山元, 淑乃, 金城尚美
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41286

サマープログラムに対するニーズと評価
― 受講生と指導者に対する調査の質的分析から ―

山元淑乃・金城尚美

1. はじめに

1.1 背景

グローバル化が進む現在，高度人材の大きな供給源となる留学生を，高等教育機関に積極的に受け入れていくことが日本の課題とされている。「日本を世界に開かれた国とし，人の流れを拡大していくために重要である」として，福田元総理が第169回国会（平成20年1月）の施策方針演説の中で「留学生受入れ30万人計画」を打ち出した。これは日本への留学生を，2020年までに，当時の14万人から30万人に増やそうという計画である。

このような流れの中，琉球大学留学生センターでは大学間交流協定に基づき，半年間または1年間の交換留学制度を実施し，積極的に交換留学生を受け入れている。しかし，経済格差や就職難，単位認定等の諸問題により，長期間来日できる留学生数は限られている。これに対して夏休み等を利用したショート・プログラムであれば，それら諸問題に制限されることなく，より多くの留学希望者に機会が提供できると同時に，本学への短期等留学のきっかけになることが期待できる。このような観点から，サマープログラムに対するニーズや成果を分析し評価することは，今後サマープログラムを継続的または定期的に実施する可能性を探る上で，意義深いと考えられる。また，授業やプログラムに関する評価は行われているが，主に量的な分析がなされているのが現状である。学習者の内面から教育効果を探るためには，質的な分析も重要であり，本研究はその分析手法と結果を示すことにより，今後の評価に関する質的分析を促進する一助となることを企図する。

1.2 A大学を対象とした琉球大学のサマープログラムについて

琉球大学では，平成10年度に留学生センターが設置されてから現在まで，協定校の大学を対象としたサマープログラムを複数回実施した実績がある。しかし定期的にサマープログラムを開講してはおらず，外国の大学からの依頼に応じてその都度，柔軟に対応したカリキュラムを構築し，夏休みに短期集中型の日本語・日本文化研修プログラムを提供している。本研究の対象となったA大学を対象としたサマープログラムも同様に、夏季休暇中10日間に渡って実施した。カリキュラムの詳細は，付録1に示した通りである。

1.3 研究目的

授業やプログラムの実施後の学習者側，指導者側，プログラム運営側等のそれぞれの観点からの評価に基づき，教育的効果を分析することが，教育の質の向上につなげられる貴重なデータとなることは，論ずるまでもない。本研究ではアンケートの自由記述欄にみられたニーズと評価に係わる記述部分を質的に分析し，学習の動機づけと期待がどのように達成されたかという観点から，教育的効果を検討することを目的とする。

1.4 参加者の属性

今回のサマープログラムに参加した学生は20名であった。参加者の属性を表1に示した。日本滞在歴のある者は1名しかおらず，滞在期間は1年間であった。日本語学習歴は平均2年6ヶ月であり，個々の学習歴は5ヶ月～5年と大きな差があった。テスト受験歴も日本語能力試験1級合格者から3級合格者までと受験歴のない者がおり，日本語力にはばらつきがあることも客観的なテストと面接により明らかであった。

表1. 参加者の属性

番号	性別	日本語学習歴	日本滞在歴	日本語能力試験[1]
1	男	3年6ヶ月	なし	3級
2	男	1年4ヶ月	なし	
3	女	3年	なし	
4	女	1年6ヶ月	なし	
5	女	2年8ヶ月	無記入	2級
6	女	2年6ヶ月	なし	2級
7	男	3年6ヶ月	なし	1級
8	女	3年	なし	2級
9	女	5年	なし	
10	女	1年6ヶ月	なし	
11	男	3年	なし	2級
12	女	1年	なし	
13	女	3ヶ月	なし	
14	男	3年5ヶ月	なし	1級
15	男	3年2ヶ月	なし	1級
16	男	1年	1年	
17	女	4年	なし	1級
18	男	5ヶ月	なし	N3
19	男	5ヶ月	なし	N3
20	女	3年	なし	

2. 事前調査にみられた受講生のニーズ

2.1 データ

平成24年度サマープログラム参加者を対象として質問紙による事前調査を行い，「サマープログラムに参加した理由」と「サマープログラムに期待すること」という二つの質問に対する自由記述で得られた回答をテキストデータとして用いた。質問紙は参加者全員から回収されたため，回収率は100%であった。

2.2 質的分析手法

分析の枠組みにはSteps for Coding band Theorization（SCAT）を使用した。SCATとは質的研究初学者にも取り組みやすく，小規模のデータ解析にも有効な手法として開発された質的分析手法である（大谷2008，2011）。SCATでは言語データをセグメント化し，そのそれぞれにコードを考案して付していく4ステップのコーディングを行い，そのテーマや構成概念を紡いで，ストーリーラインを作成し，理論記述を行う。SCATは医療研究の分野で広く使用されているが，近年は日本語教育分野においても質的な研究の手法として応用され始めており，作文授業におけるピア・レスポンスや外国人児童生徒への指導など，幅広いテーマに渡っている（浅津・田中・中尾2012，田村2011）。

この手法はとくに，データの中に潜在する意味を，分析者が構成概念として概念化することを支援する点で優れている。今回の調査でも，アンケートの回答をテキストデータとして，SCATで分析することにより，プログラムにおける参加者や教師の体験の意味，プログラムのメリットと問題点，また今後の課題などを概念化して明らかにした上で，その評価を行った。したがって本論文も，この分析で得られた構成概念を用いて記述していく。

2.3 分析結果

代表的な回答を例示しながら，SCAT分析結果を示す。以降，SCATによる分析に関する記述について，「」はテキストデータ（回答），〈〉は回答を記述した参加者の番号，**本文中のゴシック体表記**はSCATの分析により得られた概念を示す。また，記述された日本語は原文のまま記載するが，参加者の日本語の誤りや前後の文脈により，記述内容が不明瞭なものについては，()で補足と注釈を付記した。

参加者の多くが記述した「日本とはまた違った文化〈17〉」，「日本の中にも別な特別な沖縄〈1〉」，「日本なのに日本とは違う〈8〉」，「他学校とは違う，琉球ならではの，沖縄ならではの勉強したい〈7〉」，「色々な日本（の中の）オキナワは日本とは少しちがう文化をもっているからそれを学びたかった〈11〉」等に代表される**日本文化の同一性**に対する**沖縄文化の独自性**と**沖縄文化の異質性**，または**日本文化の多様性**の一部としての**沖縄文化の独自性**への興味が，サマープログラム参加の動機として現れてきた。

「沖縄に住んでいる，私たちと同じ（世代）の若者たちに会うのもとても楽しみでした〈17〉」，「沖縄人が（に）会いたかった〈19〉」，「日本人と話する（話す）ことができるいいきかから（いい機会だから）〈18〉」，「おおぜいのオキナワの人と会って色んなはなしをやりたいです〈11〉」など，参加者は**日本人とのつながり**，**沖縄県民とのつながり**，**同世代とのつながり**といった**つながりの希求**を有していることが明らかになった。また，参加者は「たくさん勉強したい〈18〉」，「かんたんにというよりは少しくわしく学びたい〈15〉」，「10日の間，全部までは無理でも学べるのは確実に学びたい〈9〉」など**学びの深さ**，**学びの確実性**をプログラムに期待していた。

2.4 ストーリーライン

分析した調査結果を，文章にまとめて記述する。この記述はSCATの分析手法においてストーリーラインと呼ばれ，SCATによる分析の結果得られた構成概念を全て用いて，分析結果を文章で示すものである。**本文中のゴシック体表記**はSCATによる分析の結果得られた構成概念である。

以降，SCATによる分析で得られたストーリーラインについては同様に記述する。

参加者は，**日本文化の同一性**に対して**沖縄文化の独自性**や**沖縄文化の異質性**を，または**日本の多様性**の一部として**沖縄の独自性**を位置づけ，**異文化への知的探究心**，**沖縄文化・沖縄史・うちなーぐち**への**学習意欲**を喚起された。また，**未体験の異文化**や**未知の文化**に対する**学習意欲**が高く，事前に沖縄に対する**スキーマの活性化**[(4)]を生じることにより，沖縄の**自然美に対するイメージの想起**を起こしていた者や，**長期的に保持した知的好奇心**や**長期にわたり高まる期待感**を持つ者もいた。**体験的学び**，**異文化接触**，**体験の多様性**，**学びの深さ**，**学びの確実性**を希求し，この機会を**多様な学びへの扉**と感じる者もいた。**日本人とのつながり**，**沖縄県民とのつながり**，**同世代とのつながり**といった**つながりの希求**が強く持たれ，**目標言語が話される地域における学習への期待感**，**外国語教育と第二言語教育の差異の自覚**がみられた。過去の**学習欲不達成感**や**学習目標不到達感**の克服を期待する参加者もいた。

2.5 理論記述

サマープログラムに対する参加者のニーズに関する事前調査から得られた理論記述を以下に示す。以降，ストーリーライン同様，**本文中のゴシック体表記**はSCATの分析で得られた構成概念である。

(1) **日本文化の同一性**または**多様性**に対する**沖縄文化の独自性**や**沖縄文化の異質性**が日本語学習者の**異文化への知的探究心**を抱かせ，サマープログラムへの参加理由となる。

(2) サマープログラムの参加に際し，来日前に沖縄に対する**スキーマの活性化**が生じる。

(3) サマープログラム参加者は，**体験的学び**，**異文化接触**，**体験の多様性**を希求し，サマープログラムを**多様な学びへの扉**と感じる可能性がある。

(4) サマープログラム参加者は**目標言語が話される地域**の人々との**つながりの希求**が強い。

(5) 過去の**学習欲不達成感**や**学習目標不到達感**克服への期待がサマープログラムの参加理由となり得る。

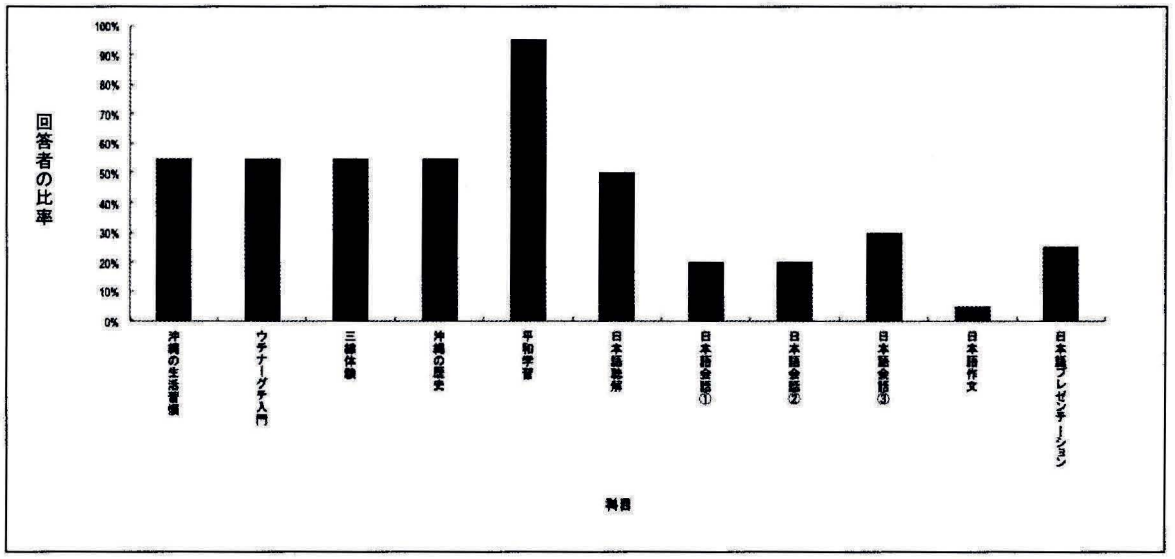
3. 事後調査にみられた満足度の分析

3.1 プログラムに対する受講生からの評価

「サマープログラムを受講してみて，興味深かったこと，または，あなたの日本語能力向上に役立つことはありましたか」という質問項目には，20名全員が「はい」と回答しており，満足度は高かったといえる。その内訳として具体的にどの科目が興味深かったかについて複数回答方式で回答を求めた（アンケートの様式は付録2を参照のこと）。結果を図1に示す。各科目の選択者数のパーセンテージを算出したところ，平和学習に対する評価が，95%と非常に高かった。また，沖縄の文化に関するプログラムには，どれも半数以上の学生が興味を示していたことがわかった。異なるレベルの日本語学習者が混在するクラスにおいて沖縄の方言や文化について日本語で学ぶのは容易なことではないと考えられるが，これらの科目が日本語そのものを学ぶ科目よりも高い評価を得ていることは注目すべきである。日本語科目の中で最も評価が高かったのは「日本語聴解」であり，これはテレビ番組『秘密のケンミンSHOW』で沖縄が取り上げられた放送映像を題材として聴解練習を行ったものである。事前アンケート調査にもみられるように，参加者は，沖縄が他の都道府県とは異なる独自の文化を有していると認識しており，沖縄独特の文化への高い興味・関心がみられた。教室内での知識の教授と併せて，沖縄

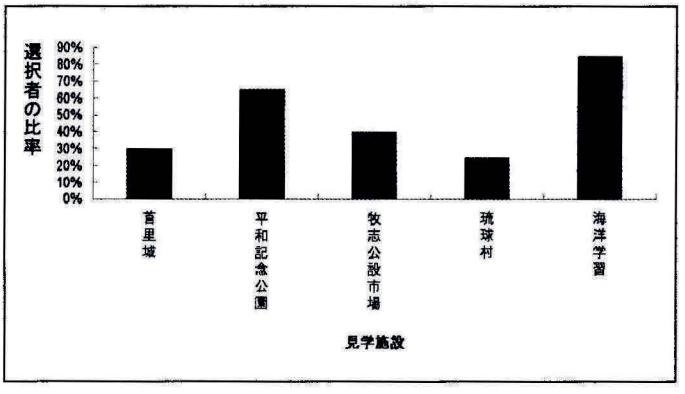
の文化を体験できる見学学習を設定したが，それらは概ね学生の期待に応えた授業であったと評価することができる。

図 1. 参加者が興味深いと感じた科目



見学学習の中で特に興味をもった場所について，複数回答形式で質問した。各見学先の選択者数のパーセンテージを算出したところ，図 2 に示した通り，最も評価が高かったのは 85%の海洋学習であり，ついで平和記念公園（65%），サバイバルトリップ（40%），首里城（30%），琉球村（25%）という順であった。プログラム参加前のアンケート調査における，沖縄に対するイメージを問う質問に対して，「海のきれいなところ」という回答が多くみられたこともあり，スノーケリングを取り入れた学習で海洋自然を体験できたことは，学生の期待に応えた活動だったと考えられる。

図 2. 見学施設で興味を持ったところ



3.2 満足度の質的分析

事後アンケートの自由記述欄をテキストデータとして SCAT により質的分析を行った。代表的な回答を例示しながら，分析結果を示す。

3.2.1 期待に添えたこと

期待通りだったことを問う質問への回答には,「琉球大学のじゅぎょうは全部期待した通りでした。〈8〉」,「期待したよりもっとよかった〈1〉」,「よくできているプログラム〈17〉」,「面白いプログラム〈19〉」等に代表されるように，プログラムやカリキュラムについて期待通りまたは**期待以上の満足感**が示された。「いるいる（いろいろ）なことを学べることができてよかった。〈4〉」,「いろいろなところにいくの（がよかった）〈12・13〉」,「たくさんのぶんかを体験してうれしかったです。〈16〉」,「プログラムもとても色々あって楽しかったです。〈8〉」など，プログラムの**多様性**が高く評価され,「さんしん[2]〈1〉」,「海洋実習としてやったスノーケリングがすごくよかったです。〈20〉」,「沖縄の歴史についていろいろ知ることが出来て本当によかったです。〈20〉」,「特に平和学習は期待した以上に面白かったです。〈9〉」といったように各科目も**期待に沿った学び**として評価が高かった。「けんきゅう（研修）きかんがみじかくていろいろなことができないと思いましたがいがいにたくさんのぶんかを体験してうれしかったです。〈16〉」という記述から，事前に**時間的制約**に起因する**期待感の阻害**があったにも関わらず，そのような参加者にも**予想外の多様性**を感じさせる**カリキュラムの綿密性**を実現することができたといえる。

「人たちのやさしさ〈14〉」,「きれいな海を見て，直接日本人と話して，全部本当におもしろかったです。〈10〉」,「町人（地域の人々）のあたたかさ〈17〉」,「親切な日本人〈19〉」といった記述から，参加者がおきなわの**イチャリバチョーデー**精神[3]に触れ，期待していた日本人や沖縄県民との**つながりの実感**を得ることができたと考えられる。

「かなり沖縄の海が期待以上でした。〈3〉」,「美しい海は期待以上でした。ほんとにきれいでした。〈6〉」,「きれいな海と空…太陽の力〈17〉」といった，自国の居住地とは異なる自然の独自性や地理的な相補的特性,「南の国ならではの文化〈7〉」,「特産物〈5〉」といった**沖縄文化の独自性**を感じ，参加者は**スキーマの活性化**による沖縄の**イメージの理想的実現**を経験したと考えられる。

以上のことから，沖縄ならではの自然環境や沖縄文化への理解を促進させるプログラムの目的は概ね達成できたといえる。

3.2.2 期待に添えなかったこと

期待はずれだったことを尋ねた質問には「期待したよりもっとよかった。〈1〉」,「特にありません〈9〉」,「×〈4〉」,「ないです～♪〈12〉」,「無いです＾0＾〈13〉」,「ありません〈19・20〉」または無記入〈3・10〉といった**期待通り**または**期待以上の満足感**が示される一方で,「琉球大学の学生達と長い時間をすごしたかったですが夏休でざんねんでした。〈8〉」,「りゅうきゅう大学のせいととあうきかいが少ししかありませんでした。〈16〉」,「沖縄の方と授業時間だけ交流できたこと。授業だからじゃなく，人と人の出会いを期待していた。このプログラム終わっても連絡できる仲になりたかったです。〈17〉」といった，**より深いつながりの構築**や**親密性の構築**のための活動を望む声も多かった。

「日本とかなり似ていた。果物がけっこう高かった。〈7〉」,「(沖縄独自の自然環境に対して)道とか通りの様子，都市〈5〉」といった**日本との類似**に不満や**イメージのギャップ**を感じる参加者もいた。これは**沖縄の独自性**への期待が非常に高いためではないだろうか。だとすれば，都心部だけではなく昔ながらの風景の残る地域にも滞在する機会を持つことで，これらの期待に

も応えられると考えられる。

「劣悪な宿所〈2〉」への不満が一名から示された。同様の指摘は引率教員からもあり，今後の宿舎選択についての課題となった。「サバイバルトリップ〈18〉」に不満足であった参加者が 1 名みられたのは，担当教員からも指摘があるように，実施場所となった牧志公設市場が参加者の宿舎に近く，既に授業時間外で訪れていたため，**既体験事項の学習に対する嫌忌**を引き起こしたのではないだろうか。この点については，宿舎を別の場所にする，サバイバルトリップのタスクを授業時間外に設定するなどの対応策が考えられる。

また，海洋実習でのスノーケリングについて「最始はおもしろい思い出になると思いましたが，hychophobt〈水がしわくなるなる病のこと（水恐怖症）〉ができてしまいました。〈15〉」という**個人的事情**により活動に満足できない参加者もいた。このような参加者に対しても，事前に調査して別の活動を準備するなど，**個別対応**の必要があるといえる。

「暑さ…〈6〉」，「思ったより暑くなかった。〈11〉」，「何だか所所のきょりがあっていとう（移動）するとき思った以上に時間がかかりました。〈8〉」といった対応不可能な**気候**や**環境**が理由となり期待に添わなかった点も指摘された。

3.2.3 自由記述

アンケートの最後の自由記述欄には，「いいプログラムありがとうございます。〈2〉」，「本当にありがとうございました。10 日間お世話になりました。〈8〉」，「研修で様々なことを教えて下さった琉球大学の方々にどうもありがとうございます。〈5〉」，「私は日本語が大好きですからべんきょうします。沖縄でいいなけいけんさせてほんとうにありがとうございます。〈18〉」といった回答に代表される，**深い感謝の念**が記された。「まだまだ日本語がへたな私にいろんなことをやさしくおしえてくれてありがとうございます。〈16〉」，「私たちにやさしく教えてくださって本当にありがとうございました。〈11〉」，「良い授業ありがとうございます。〈7〉」といった記述から，学生と接触した**教師の質**も評価されていると考えられる。

「サマープログラムは本当にすきだったんです。日程もすきだったんです。来年もこのようにサマープログラムがあってほしいです。本当におもしろかったです！ありがとうございました。〈10〉」，「また来たいのでそのときこのプログラムがあったらと思います。〈6〉」といった**再来沖の希求**を表す意見も多く，本プログラムは**真の高評価**と**心底からの高評価**を得たといえる。

参加者は「本当に沖縄が恋しくなりそうです。〈4〉」，「去年にも沖縄に来ましたが，今回に沖縄を恋することになりました。いつか沖縄で住みたいです。〈20〉[5]」，「これからも，とこでとんなかたちで会えるか分かりませんがまた会えたいきもちです。〈8〉」といったように沖縄への恋着を示し，「このような貴重な体験を味わせていただいて本当に面白かったです。また来たいです！〈9〉」，「ぜひ，また来てみたいと心から思っております。〈7〉」，「できたらまた来てもっと色んなことを見たり聞いたりしたいです。〈11〉」，「おもしろかったです。またおきなわにきてほしいです。おきなわにすみたいです。〈12〉」のように，多くの参加者がいわば**沖縄リピーター候補**と考えられる。さらに「またおきなわとりゅうきゅうだいがくに来たいんです。〈16〉」，「今，日本語は上手ではないですが，日本語が上手になる後でここに留学生として行きたいです。〈18〉」，「琉球大学で交換学生で来たいです。〈19〉」といった記述から，本プログラムは**長期留学への動機づけ**に貢献したといえる。

しかしながら，「沖縄は思っていたより親しい減じ（感じ）がしました。〈5〉」，「みんなやさ

しく，声かけてくれて本当に楽しくすごした10日間でした。〈8〉」といったように**つながり**への評価がある一方で，ここでも「もっと学生と話しする時間があったらもっとうれしくなると思います。〈1〉」,「学生（沖縄と韓国）たちがお互い友達にあんって（あって）欲しかったです。〈17〉」と**親密性の希求**もあった。参加者と日本人学生が友情を育む活動を，限られた授業時間内で実現することは難しいが，各参加者またはグループ毎に日本人学生チューターを配置することなどが一助となる[(6)]と考えられるため，今後の課題としたい。

授業方法に関し「プレゼンの時あらかじめ『このようにしなさい。』みたいなリクエストをいただいたなら，もっと頑張ることが出来たと思います。〈15〉」という意見があった。琉球大学では学習者の自律学習能力の育成に力を入れ，教室活動でも出来る限り学習者に自由に自己表現ができるよう配慮し，学習者主体の教育を重視している。その指導法が普段受けている教育と異なったことが，**教育環境の過度の変化**となり**授業方法への不適応**を引き起こしたのではないかと考えられる。サマープログラムのような短期間の指導においては，今後，考慮すべき課題であるといえる。

また，「いろんな思い出が生じるようになってとてもうれしいです。〈5〉」と**経験の多様性**が評価される一方，「（那覇だけではなく）もっと多様なプログラムをすれば…〈3〉」と**拠点移動の必要性**を求める意見や，「もっと文化体験をしたいです ＞_〈〈17〉」,「ちょっと遠いですけど北の島も行きたかったです。〈1〉」,「もっと多いけいけん，とくに美ら海（ちゅらうみ）みたいな北地方でのプログラムがあれば良いんじゃないかと思います。〈14〉」のように**多様性の広がり**を求める意見もみられた。カリキュラムには那覇以外の場所が多く組み込まれていて種々の体験ができたにもかかわらず，宿舎は全体を通して同じ場所（那覇）であり，変化が乏しかったことが要因の一つである。宿舎を那覇だけではなく中部や北部に移動していくことで，プログラムに**多様性の広がり**を与えることができると考えられるため，これも今後の課題の一つとしたい。

3.2.4 ストーリーライン

事後調査のSCATによる分析の結果得られたストーリーラインを以下に示す。

サマープログラム参加者は**未知の文化の体験**，**期待に沿った学び**，**日本語力の向上**，**プログラムの独自性**，**経験の多様性**を経験し，**期待通り**または**期待以上の満足感**を感じ，**教師の質**を評価し，**深い感謝の念**を表した。

カリキュラムにおける**多様な体験**，**学習の多様性**といった**プログラムの多様性**が高く評価され，**時間的制約**による**期待感の阻害**を感じていた参加者にも**予想外の多様性**を感じさせる**カリキュラムの綿密性**を実現できた。**再来沖の希求**により，本プログラムが**真の高評価**と**心底からの高評価**を得たといえる。また**期待以上の自然体験**や**つながりを築く活動**を取り入れた**地域特性をいかしたカリキュラム**と**プログラム構成**も高く評価された。

つながりの実感と**沖縄への恋着**を感じた参加者は，より**深い体験**を求め，**沖縄リピーター候補**となったと考えられる。さらに、本プログラムが**長期留学への動機づけ**となる参加者もいた。

沖縄文化の独自性，**都市の日本との類似性**に対する**自然の独自性**，韓国との気候の違いに起因する**地理的な相補的特性**など，沖縄の**地域特性**への高い満足度が示された。多くの参加者が沖縄県民の**イチャリバチョーデー**精神に触れ**つながりの実感**を持ち，**平和希求**に共感し，**スキーマの活性化**による沖縄の**イメージの理想的実現**を経験した。

しかしながら参加者は，日本人や沖縄県民との**より深いつながりの構築**と**親密性の構築**のための活動と，さらなる**多様性の広がり**を要求した。**気候，環境，日本との類似点**への不満や，**イメージのギャップ，既体験事項の学習に対する嫌忌，拠点移動の必要性**を感じた者もおり，**個人的事情**に配慮した**個別対応**や，**教育環境の過度の変化**による**授業方法不適応への対処**の必要性も示唆された。

3.2.5 理論記述

事後調査の SCAT による分析の結果得られた理論記述を以下に示す。

(1) サマープログラム参加者は**プログラムの多様性**を評価する。
(2) サマープログラム参加者は**つながり**と**沖縄への恋着**を感じ，評価する。
(3) サマープログラム参加者はより**深い体験**を求め，沖縄への**リピーター**候補となる
(4) サマープログラムは**長期留学への動機づけ**に貢献する。
(5) サマープログラム参加者はさらなる**多様性の広がり**と**親密性**を希求する。

4. 授業担当教員による振り返り

今回のサマープログラムの参加者には学習歴 5 ヶ月の初級者から 5 年の上級者までが混在していた。それにも関わらず参加者の満足度が非常に高かった要因として，授業担当教員による協同学習の円滑な運営があったことが考えられる。この要因と教育効果を探索すべく，授業担当教員に対して質問紙調査を行い，授業実践を振り返る機会を持った。本節ではその自由記述による回答をテキストデータとして質的に分析し，協同学習があげた教育効果を探索する。

4.1 データと分析手法

サマープログラムで授業を担当した教員に対し，質問紙による事後調査を行い，質問に対して自由記述で得られた回答をテキストデータとして用いた。質問項目の詳細は付録 3 に記載する。質問紙は授業担当教員 7 名中 5 名から回収され，回収率は約 70%であった。分析の手続きには Steps for Coding band Theorization (SCAT) を使用した。記述された日本語は原文のまま記載する。

4.2 回答者の属性

授業担当教員の属性を表 2 に示す。

表 2. 授業担当教員の属性

番号	性別	担当授業
1	女	日本語⑥（プレゼン）見学（琉球村）
2	女	日本語②（会話）・見学（牧志公設市場）
3	女	沖縄文化①（生活，しきたり）沖縄文化②（ウチナーグチ入門）
4	女	日本語④（会話）日本語⑤（作文）
5	女	平和学習①②・見学（平和祈念公園）

4.3 分析結果

レベル差に対してどのように対応したかという点については,「グループ内でサポートし合えるよう，レベル差を考慮したグループが作られていた〈2〉」,「学生同士でうまく通訳をしながら助け合っていたので，授業を行ううえで困ることはりませんでした〈5〉」等の記述に代表されるように，**互恵的相互依存**を持たせた**グルーピング**が功を奏し，母語による**相互協力関係**が構築されたことが明らかになった。さらに「グループ分けが非常に良く，各グループのリーダー達もしっかりした学生で統率がとれていたので，活動する上でとても楽でした。〈2〉」,「学生同士の仲がよく，お互いに助け合おうという姿勢が見られたという印象です。グループでの活動ではリーダーを中心によくまとまっていました。〈4〉」といったように，**優れたリーダーシップ**が発揮され**能力格差の逆利用**が実現した。それに加え,「授業の中で説明が多くなると，熱心に聞く学生と，集中できずに下をうつむく学生とがいたので，できるだけパワーポイントの写真や説明に注目させ，今何をしているか，手がかりが得られるようにした。〈3〉」,「導入で，必要な事柄を書いた紙を用意し，学生達にゲーム感覚でホワイトボードに貼ってもらいました。そうすることで，日本語力の弱い学生も語彙を確認できたかと思います。〈5〉」,「方言の特徴や文化の特異性などについて，沖縄にいる間に目にする可能性，体験する可能性のあるものを導入にすると，日本語を十分に使えない学生も熱心に取り組んでいたように思う〈3〉」といったように，授業担当教員が**沖縄の独自性**を強調した**五感に訴える学び**により，**低日本語運用力参加者のフォロー**を行いながら**観察と調整**を続けたことが明らかになった。この**グルーピング**，**リーダーシップ**，**五感に訴える学び**による**低日本語運用力参加者のフォロー**が相互に作用した結果，**日本語低レベル参加者のすくいあげ**が可能になったと考えられる。

しかし「短い時間なので，内容をいかにすべきか，悩みました。短い時間で，勉強をしたという満足感が得られるように取り組むのは難しい。〈3〉」や「短い時間だったので，表面的なことしか触れられず，方言や沖縄の文化に触れるきっかけになったかどうか，疑問に思った。〈3〉」のように，**時間的制約**のなか**短期到達目標設定**に困難を感じる授業担当教員もいた。

参加者の受講態度については,「日本語がよくできる学生が，まだ十分ではない学生を気遣って，説明をしてくれたことが好印象でした。〈3〉」,「熱心さがつたわり，こちらも真摯な気持ちにさせられた。〈3〉」,「明るく素直で，礼儀正しかったのが好印象でした。短い時間でしたがこちらも楽しくできました。〈2〉」,「素直でいい学生ばかりでした。日本語も積極的に使用しようとしていた。〈1〉」,「授業後の質問も多く意欲が感じられました。〈5〉」といったように，参加者の**素質**や**動機づけの高さ**が高く評価された。「学生たちの主体的な姿勢がなければ大変だったと思います。〈4〉」や「沖縄滞在を楽しみつつ，与えられた課題にも積極的に取り組んでいて，とてもすばらしいと思いました。〈4〉」といった参加者の**主体性**や**学遊両立**を評価する意見もあった。ただ平和学習の見学に関してのみ,「授業のときの学生の態度に比べ，少し『遊び』感覚が見受けられました。2時間程度予定をとってあったと思いますが，20分程度で見学を終え，その後は海の記念撮影などを行う学生も多く見られました。せっかくの見学ですので，ガマの体験やひめゆりのお話を聞くなどの実際に沖縄戦を肌で感じられる内容もあったほうがよいかと思います。〈5〉」と，参加者による**真摯さの低減**が報告され，**肌で感じる平和学習**の必要性が訴えられた。

プログラムについて「様々なアクティビティと学習が盛り込んであって，コンパクトかつ飽きさせない内容になっていたと思います。」と**プログラムの多様性**と**凝縮された学習内容**が授業

担当教員からも評価され，「日本の中の数ある大学の中で，特に「沖縄」を選んでくる先方の気持ちを考えると，今後も教室内にとどまらず，沖縄を体感できるような内容を続けていくべきではないかと思います。（台風の問題もあり，なかなか難しいですが）〈1〉」と**体験的学びの継続**が必要であるとされた。しかし，「短期間にできることは限られているので，授業で取りあげる内容を選択するのは難しい。サマープログラムの全体で，キャッチフレーズのようなテーマなどがあると，授業も組みやすいかも知れません。〈3〉」，「プログラムの全体像をきちんと把握しないまま直前にバタバタと準備をしたため，多少ずれた内容の授業になってしまいました。〈4〉」といったように，プログラムの**全体像把握**や**統一目標の設定**が課題となった。また，「（後に続く授業の）詳しい内容がわからないまま準備をしました。〈4〉」，「学生に前もって最終的な情報が伝わっていませんでした。〈4〉」，「事前に学生達の興味関心時や自己紹介のようなものがあるとイメージしやすいかと思います。〈5〉」，「できれば，コーディネーターの方と相談したり，一緒に講義を担当する先生同士で一度相談したりする時間などがほしいです。〈5〉」など，**事前情報共有**や**派遣校を含めた担当者間の連携**の必要性も示された。「国際通り・市場探検をした際，学生達の宿泊先が美栄橋ということで，すでに見ている，行ったことがあるところ，という声もあり，もし今後同じようにするならタスクの内容についてはその点を考慮する必要があるかもしれない。〈2〉」といった**既体験の学習事項**への注意という今後の課題も浮かび上がった。

4.3 ストーリーライン

授業担当教員によるアンケート調査の SCAT による分析の結果得られたストーリーラインを以下に示す。

互恵的相互依存を持たせる**グルーピング**により**相互協力関係**が構築され，**優れたリーダーシップ**が発揮されることにより，参加者間の**能力格差**問題が解決されたばかりでなく，**能力格差の逆利用**が発生した。さらに担当教員による**沖縄の独自性**を強調した**五感に訴える学び**により**低日本語運用力参加者のフォロー**と**観察と調整**が行われ，**低日本語レベル参加者のすくい上げ**が実現した。**時間的制約**のなか**短期到達目標設定**に困難さを感じる者もいた。授業担当教員は参加者の**素質**，**動機づけの高さ**，**主体性**，**学遊両立**を高く評価したが，平和学習に関してのみ参加者による**真摯さの低減**が報告され，**肌で感じる平和学習**の必要性が訴えられた。コーディネートに関して**プログラムの多様性**と**凝縮された学習内容**が評価されたが，課題として**全体像把握**，**統一目標の設定**，**事前情報共有**，**派遣校を含めた担当者間の連携**，**既体験の学習事項**への注意，**体験的学びの継続**の必要性が示された。

4.4 理論記述

授業担当教員を対象に実施したアンケート調査の分析で得られた理論記述を以下に示す。

(1) **互恵的相互依存**を持たせた**グルーピング**により**相互協力関係**が構築され，**優れたリーダーシップ**が発揮される条件の下では，サマープログラム参加者間の**能力格差**問題解決が可能であるばかりでなく，**能力格差の逆利用**が可能になる。

(2) サマープログラム担当教員は**五感に訴える学び**による**低日本語運用力参加者のフォロー**を行い，**低日本語レベル参加者のすくい上げ**を実現する。

(3) **沖縄の独自性の強調**により参加者の**ニーズとの合致**が可能になる。

(4) サマープログラムのより円滑な運営には，授業担当教員によるプログラムの**全体像把握**，

統一目標の設定，事前情報共有，派遣校を含めた担当者間の連携が必要である。

5. 引率教員からのプログラムに対する評価

A 大学の引率担当教員 1 名に対して，プログラムに対する意見や要望への回答を求めた。プログラム・授業全般に対する構成，日本語の授業・アクティビティに対する学生の理解度や満足度，学習環境について，リッカート法により選択肢 5 つ（「そう思わない」，「あまりそう思わない」，「どちらでもない」，「ややそう思う」，「そう思う」）のうち最適なものをひとつ選ぶ形式で評価を依頼した。質問項目の詳細は付録 4 に示す。

その結果，唯一「宿泊は便利で快適だった」という項目に「ややそう思う」という回答がみられるのみで，他の項目は全て「そう思う」が選ばれていた。「ややそう思う」という回答理由は，「宿泊場所が男女各 1 つずつしかなく，20 名が利用するには少し不便であった。プログラムの内容には非常に満足している。学生の声を聞いたところ，午前の授業内容を基として午後に見学することで，より深く沖縄の歴史や文化などを理解できたという評価がみられた」とあった。今回の宿泊場所に対しては，特に学生が自由に散策しやすい立地性・利便性に配慮し，選択した。その点に関しての評価は高かったが，施設の設備の利便性に対して，次回はより一層の配慮が必要だということが分かった。プログラムの内容に関しては，満足度や達成感，改善点や提案などに対する自由記述（詳細は付録 4 を参照）の内容も踏まえ，結果を考察すると，沖縄の文化や歴史を知識と体験という両方からアプローチしたことが，留学生を派遣する教育機関のニーズに応え，満足度を高めたと考えられる。

6. 今後の課題

今回の調査では満足度や授業運営について自由記述で回答を求め，分析を行った。その際，SCAT を用いた分析によって，参加者や教師の体験の潜在的な意味を概念化することができた点は有意義であった。しかしながら，サマープログラムへの参加が，いかに日本語学習に対する動機づけや文化理解に影響を及ぼすかということについては，より詳細な分析が必要である。そこで，プログラム参加の前後での動機づけや興味の変化について調査することも今後の課題とする。参加者の内発的動機づけの高さは分析から明らかになったが，プログラム修了後や大学卒業後の学習継続への動機づけ，およびその後の留学行動に，サマープログラムがどのように影響を与えたかを検証することは，サマープログラムの教育効果や意義について考える上で，貴重なデータになるであろう。

今回は，ほとんどの参加者が日本における滞在経験がなかった。日本で行う学習による参加者の日本に対するイメージの変化を調査することで（金城 1998），異文化体験や異文化交流による学習者の内的変容を明らかにすることも，今後の課題とする。また，今回，プログラム企画の主な課題として浮かび上がった**親密性を築く活動**がもたらす教育効果についても，検証していくべき課題であるといえる。

今回の A 大学からの依頼では、「日本全国各地でサマープログラムを開催していく予定のため，本学への依頼は一度限り」ということであった。しかしプログラム修了後，参加希望者からの要望が非常に多く，例外的に**二度目の依頼**を受けることになり，平成 25 年度にも実施する予定となった。本研究で得た知見をいかし，より良いプログラムの提供につなげていくことが期待される。

注

(1) 2009年までは1級（上級）～4級（初級）の4段階で、2010年以降N1（上級）～N5（初級）の5段階に変更されている。

(2) 沖縄県および奄美群島で用いる弦楽器。三味線を小ぶりにした形で、両面に蛇皮を張った木製の胴に棹をつける。

(3) 「一度出逢ったら皆兄弟だから仲良く付き合おう」という意味の、沖縄の精神を表す言葉。

(4) 特定の事象に対する人間の既存知識の構造的な枠組みをスキーマ（schema）といい、スキーマを「活性化」させることが，記憶の呼び出し，判断，理解など様々な認知活動に関与するという（Rumelhart 1980）。

(5) この参加者<20>の記述は，表1の「日本滞在歴なし」と矛盾する。これは「日本滞在歴」という項目を「日本に住んだことがある」と理解したためではないかと考えられる。今後はアンケートに学習者の母語で翻訳を付け，このような誤解を防ぐ必要がある。

(6) サマープログラムにおけるチューターの活用は日本語能力差の問題の解消にも貢献する（杉原他 2011）。

引用文献

浅津嘉之・田中信之・中尾桂子（2012）「学習者の意識分析から考える日本語作文授業における非対面ピア：レスポンスの可能性」応用言語学研究論集，5：59-70

大谷尚（2008）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案　－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き－」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』v.54，n.2，27-44

大谷尚（2011）「SCAT：Steps for Coding and Theorization― 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法 ―」『感性工学』Vol.10，No.3，155-160

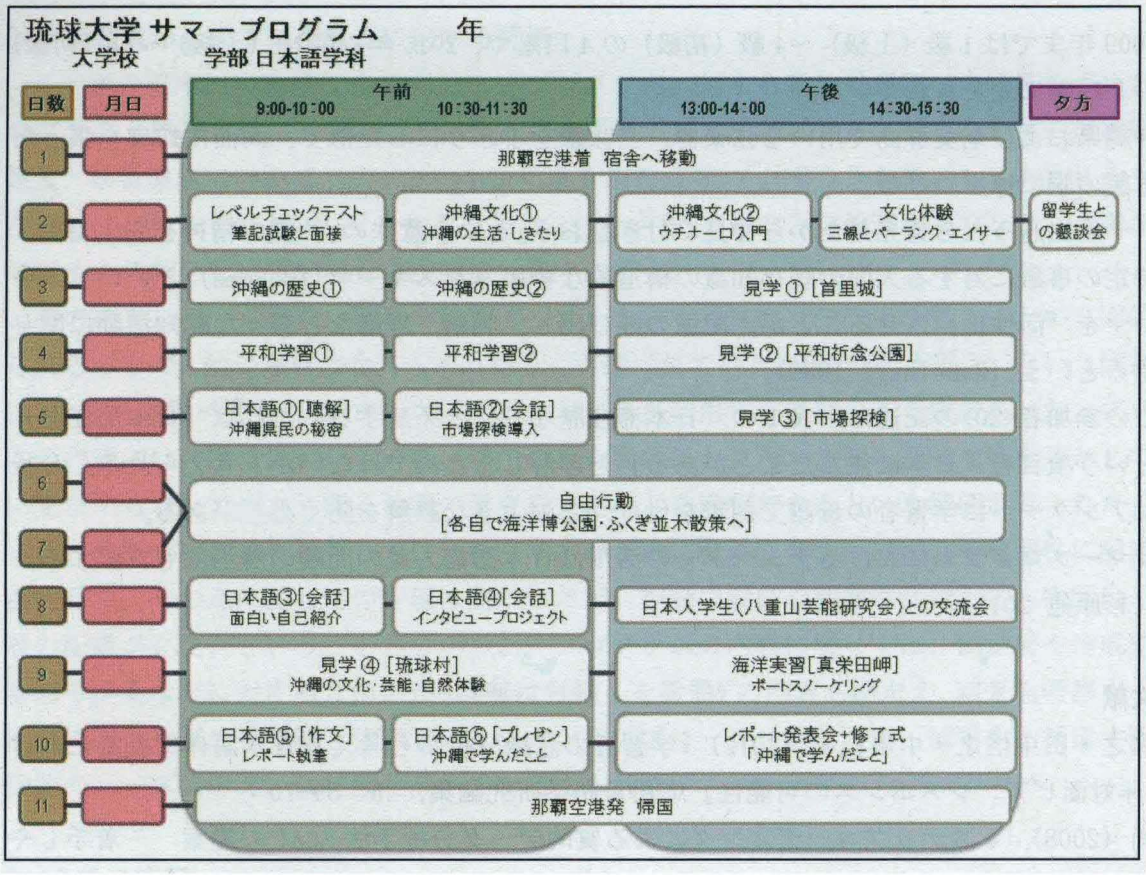
金城尚美（1998）「異文化交流による心的態度の変容：韓国人留学生と日本人学生の合同クラスを通して」『Southern Review』No.13，沖縄外国文学会，37-54

杉原道子・内山浩道・家根橋伸子・石口智堂・徳永慎太郎（2011）「グローバル化時代における大学の短期語学研修プログラムの真価 ： 日本語・日本文化サマープログラムの実践と考察」『大学教育』8，65-77

田村京子(2011)「小学校の日本語指導教室の事例に見る人材の効果的活用のあり方 -日本語教育経験者の有効的な活用-」創価大学大学院紀要（33），279-297

Rumelhart, D. E. Schemata: The building blocks of cognition. In R. J. Spiro, B. C. Bruce, & W. F. Brewer (Eds.), *Theoretical issues in reading comprehension: Perspectives from cognitive psychology, linguistics, artificial intelligence, and education.* (1980) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum,

付録 1. サマープログラムのカリキュラム



付録 2. 参加者へのアンケート様式

年 琉球大学　サマープログラム　アンケート

対象者：
調査日：
調査者：琉球大学留学生センター

このアンケート調査は、サマープログラムに対するあなたの意見や要望を聞くことによって、今後、プログラムの内容を考える上での資料とするためのものです。他の目的に使用することはありませんので、最後まで正確に回答してください。
※1～2はプログラムの前に記入してください。アンケートは一旦回収して、プログラム終了後に3～5を記入してもらいますので、よろしくお願いいたします。

1．個人データ

氏名（ふりがな）		性別	男　・　女	出身地	
所属（学部）		専攻			
日本語学習歴	合計　　年　　ヶ月				
日本滞在歴	□ なし　　□ あり（合計　　年　　ヶ月）				
テスト受験歴	□日本語能力試験 JLPT（　　級・合格）□JPT（点数　　点） □その他（　　）				

2．琉球大学サマープログラムについて

このプログラムに参加した理由	
このプログラムに望むこと このプログラムで学びたいこと	
沖縄について知っていること 沖縄に対するイメージ	

年 琉球大学　サマープログラム　アンケート

3．琉球大学のサマープログラムを受講してみて、興味深かったこと、または、あなたの日本語能力向上に役立つことがありましたか。

□ はい　　□ いいえ

→「はい」と答えた人は、具体的にどんなことが興味深かったですか。（複数回答可）
□沖縄の文化①（生活習慣）　□沖縄の文化②（ウチナーロ入門）□文化体験（三線）
□沖縄の歴史①②　□平和学習①②　□日本語①聴解（転勤ドラマ）□日本語会話①
□日本語会話②　□日本語会話③　日本語作文　□日本語⑥プレゼン

見学の中で特に興味を持った見学は何でしたか。どうしてですか。（複数回答可）
□首里城　□平和祈念公園　□サバイバルトリップ（市場探険）□琉球村　□海洋実習

→「いいえ」の人、原因は何ですか。
□教え方が悪かった　□プログラム内容が自分の希望と合わない　□時間が足りなかった
□その他　（　　）

4．サマープログラムに参加する前に期待していたことが体験できましたか。
期待通りだったこと、期待はずれだったことを書いてください。

期待通りだったこと

期待はずれだったこと

5．その他、要望、意見、琉球大学へのメッセージを書いてください。

ご協力ありがとうございました。

付録 3. 授業担当教員へのアンケート質問項目

① 担当された授業の内容

② 受講生間の日本語運用能力の差にどう対応されましたか。

③ レベル差以外で授業運営について難しいと感じたところがありましたか。あればどんな点で，それにどのように対応されましたか

④ 授業についてその他にどんな点がよかった，または悪かったと思われますか。それはなぜですか。

⑤ サマープログラムに参加した韓国の学生たちについてどうお感じになりましたか

⑥ 今後サマープログラムを実施する上で留意すべき点，改善点，ご要望等があればお書きください

付録 4. 引率教員のサマープログラムに対する評価の自由記述回答

- 参加者がサマープログラムに参加する前に期待していたことが体験できたと思いますか。期待通りだったこと，期待はずれだったことをお書きください。

- 引率教員から見て，参加学生の満足度はどの程度あったと思いますか。また，日本語や日本文化を学ぶという点での達成感はどの程度あったと思いますか。

- 今後もこのようなプログラムを継続した方がいいと思いますか。継続する場合の改善点，提案などをお書きください。

- 琉球大学のスタッフにメッセージがおありでしたらお書きください。